

日本生態学会関東地区会会報

第74号



目次

特集1：日本生態学会関東地区会公開シンポジウム 「Implications of animal personality in the modern changing world」 酒井理（東京農工大学）・内田健太（東京大学）	2
特集2：日本生態学会関東地区会公開シンポジウム 「若手で語ろう！生態学 第5回 ～生物を知り、守る生態学～」 平野日向（農工大院）・上野尚久（遺伝研）・大崎壮巳（早稲田大）・岡田遼太郎（高知昆虫研究会）・蕪木史弦（新潟大）・佐々木悠人（愛媛大）・永濱藍（科博）・夫婦石千尋（九大院）	4
2025年度における地区会活動記録	7
2025年度会計報告	10

日本生態学会関東地区会発行

2026年3月7日

日本生態学会関東地区会公開シンポジウム 「Implications of animal personality in the modern changing world」

企画者：酒井理（東京農工大学）・内田健太（東京大学）

日時：2025年4月19日（土）13:00-17:30

会場：東京大学弥生キャンパスおよびオンライン（Zoom）

概要

2000年以降の行動生態学において盛んに発展してきた研究トピックとして動物の個性（Animal personality）とヒトによる急速な環境変化（HIREC）への反応があげられる。これらの研究トピックは理論的枠組みの整理や実証研究を重ねて成熟してきたが、そのトピックに従事する研究者が着目する現象のスケールには依然としてギャップが存在している。そこで、本企画ではこれらのトピックに関する枠組みの融合を目的とし、様々な観点からその生態学的な帰結を議論した。特に、動物の個性や集団内の多様性を探求している演者をお招きし、社会形成、個体間相互作用、個体群の機能、捕食者-被食者系の観点から個性の意義について話題提供して頂いた。また、シンポジウムの最後には聴衆を巻き込んだグループ討論の時間を設け、「HIRECによって集団中を構成する個性が偏ると、どのような影響が生じるのか？」この問いに関して様々な背景を持つ研究者からのフィードバックを頂いた。

Abstract

The significance of individual variation, beyond the scope of the group averages, has been acknowledged within the field of ecology. In particular, in behavioral science, the concept of “animal personality” has emerged as a burgeoning research topic over the past two decades. Currently, the majority of behavioral ecologists (though not all) recognize the impact of animal personality on various ecological contexts. However, the extent of our understanding regarding its implications remains uncertain. It is timely to review the accumulated knowledge on the implications of animal personality. This symposium specifically aims to elucidate the consequences of animal personality in the contexts of social interactions, group dynamics, and inter-specific interactions.

Moreover, the symposium will include a discussion session focusing on human-

induced rapid environmental changes (HIREC). While the original framework of HIREC considers substantial individual differences in behavioral responses to novel challenges or resources, addressing more specific scenarios is valuable. Key questions include: (1) Does HIREC change the composition of individual behavioral types, resulting in modified populations (referred to as personality bias)? and (2) How does personality bias influence the outcomes of social, group, and interspecific dynamics? By gathering feedback from a diverse group of ecologists, we aim to integrate the research topics of animal personality and HIREC, thereby establishing a new direction for future research.

講演者・演題

Speaker and title

Andrew Sih (University of California, Davis) 「Why should ecologists care about animal personalities or behavioral syndromes: three case studies」

Shiomi Hakataya (University of the Ryukyus) 「How is personality linked to social interaction patterns?」

Wataru Takeda (Nagoya University) 「Personality in Seabirds: Relationships with Breeding, Foraging, and Repeated Human handling」

Yuma Takahashi (Chiba University) 「Less is Bore, More is More: Ecology of Individual Differences」

Takahira Okuyama (Chiba University) 「Heterogeneity resolves the behavioral trade-off between exploration and vigilance in *Drosophila*」

Kentaro Matsumura (University of Tokyo) 「Effects of individual differences in the locomotor activity of assassin bugs on predator-prey interactions」

当日の様子

当日の参加者は合計で 96 名に達し（現地参加が 32 名、オンライン参加が 64 名）、日本の学术界では馴染みの薄い研究トピックに対しても活発な質疑応答や議論が行われた。参加者の年齢層は幅広く、所属機関は多岐に渡っていた。さらに、本シンポジウムでは全て英語を用いて進行するという事もあり、日本語を母国語としない参加者の姿も見受けられ、国際色の豊かなシンポジウムとなった。強いて聴衆や参加者の特徴を挙げるならば、比較的若手の研究者（学生、ポスドク、助教）が多い傾向にあり、日本の行動学や生態学においても新

たな潮流が起こりつつある気配を感じさせるものであった。また、シンポジウム後には懇親会も催され、15名ほどの参加者が軽食を片手にカジュアルな雰囲気の中で更なる議論の機会を楽しんだ。特に、日本の研究者にとって Sih 教授と研究内容やキャリアに関してゆっくりと話せる機会は貴重な経験となり、参加者からはとても好評であった。

翌日(4月20日)には小人数(8名)での深い議論の場を設けた。午前11時から開始し、お昼休憩を挟んで、午後4時にグループ討論は終了した。

Animal personality と HIREC の理論的な枠組みを統合させた場合、予測される生態学的な帰結に関して具体的なシナリオを交えながら意見を交わした。これらの議論の内容は意見論文としてまとめて学術雑誌に投稿すること目標として掲げ、討論の参加者で具体的な方針を共有した。今回のシンポジウムはこの一連の動向の出発点としての役割を持ち、今後も定期的な意見交換を交わしながらレビュープロジェクトを推進していくことで話がまとまった。

日本生態学会関東地区会公開シンポジウム 若手で語ろう！生態学 第5回「生物を知り、守る生態学」

平野日向(農工大院)・上野尚久(遺伝研)・大崎壮巳(早稲田大)・岡田遼太郎(高知昆虫研究会)・蕪木史弦(新潟大)・佐々木悠人(愛媛大)・永濱藍(科博)・夫婦石千尋(九大院)

日時：2025年4月26日(土曜日) 13:30~18:30

会場：オンライン (Zoom)

概要

関心を持つ人は増えている。しかしながら、実際に保全学に携わる研究者は依然として少なく、特に生態学を学ぶ学生の中で保全研究に進む人材の数は限られており、今後、保全生態学の分野を発展させるためには、関心を持つ学生や若手研究者が情報交換できるコミュニティが必要である。また保全生態学は生物多様性の維持・回復という目的を達成するための学際的な分野であることから、様々なバックグラウンドを持った研究者が交流できる機会は重要である。本企画は、オンライン形式での交流を通じて、保全学に関心を持つ学生や若手研究者がつながる場を提供し、保全生態学の発展の一助となることを目指した。保全生

態学を実践する研究室は地域密着型であることが多く、地方大学に所属する研究者にとっては、対面で実施される研究集会への参加が難しい場合がある。すなわち、地理的制約を超えた広範な研究者ネットワークを構築し、継続的な情報交換や協力の機会を生み出すことが重要となる。そこで本企画では、オンラインで開催することで、様々な生物分野に興味関心を持つ研究者および大学院生を招待し、講演を通じて異分野間の交流を促進する。また今回は新たな試みとして、事前に設定したテーマに基づき、参加者が積極的に意見を交わすグループディスカッションの場を設けた。このような活動を通して、参加者には各自の関心分野の理解を深めるとともに、研究課題やその解決策について新たな視点を得る機会としていただく。このように、多様な背景を持つ参加者が交流できる場を設け、多様な視点を持つきっかけを提供することで、保全生態学への関心を深めることにつなげることを目的とした。

講演者・演題

第1部

大川夏生（日本大学）「侵略的植物アカギから守れ！ 一小笠原の希少植物保全の今一」

江指万里（北海道大学）「謎多き希少種オオコノハズク 一巣箱を用いた生態調査と保全について一」

片岡利文（東京都立大学）「超希少種ヤクシマウスユキソウの分類学的改定と生育域外保全」

菅原早紀（鹿児島大学）「天然記念物ヤエヤマセマルハコガメの生態」

第2部

出戸秀典（ミヤマシジミ里の会事務局）「農地に生息する希少種を研究対象にする面白さと難しさ～ミヤマシジミを例として～」

二村凌（Leibniz Institute of Freshwater Ecology and Inland Fisheries）「魚釣りがもたらす生態学的な帰結：全生態系モニタリングによる実証研究」

深野祐也（千葉大学）「進化生態学者がビジネス界隈に潜入してみた話」

亘 悠哉（森林総合研究所・主任研究員）「奄美大島のマングース根絶達成までのブレイクスルー」

第3部 グループディスカッション

- ①植物の分類をどのように保全に生かすか
- ②希少植物の保全と植物園の役割
- ③西表島でハコガメと共生するための取り組み
- ④希少動物を対象としたフィールド調査とアウトリーチ活動
- ⑤保全×行動生態学
- ⑥チョウ類の保全と住民組織による実践
- ⑦外来種対策と順応的管理課題
- ⑧生態学とビジネスの関わり方

当日の様子

当日は約 60 名の参加者が集まり、前半は講演セッション、後半はテーマディスカッションを実施した。ディスカッションでは、各演者の専門分野における課題や現状について活発な議論が交わされた。その中では、フィールドでの研究経験に基づく調査にとどまらず、生態学分野をいかにマネタイズしていくかという、極めて建設的かつ実践的な内容であり、今後の分野発展において重要な議論が展開された。さらに、共催いただいた保全生態学若手の会の方々とも、スタッフ同士の交流を通じて交友関係を深めることができた。以上の点から、今回のシンポジウムは参加者・スタッフ双方にとって有意義な会であったといえる。

2025年度における地区会活動記録

(1) 第46回関東地区生態学関係修士論文発表会
毎年恒例の修士論文発表会を下記のとおり開催した。

日時：2026年2月15日(日)

会場：東京大学柏キャンパス・大気海洋研究所

実行委員：秋山 礼 (東京大学)・安樂 健太 (東京大学)・鎌田 真壽 (東京大学)・
長谷川 隼也 (東京大学)・安田 晶南 (東京大学)

後援：日本生態学会関東地区会

【口頭発表演題】

福澤 航生 (東京大学) 知床半島のオショロコマにおける浸透性交雑が個体レベルの適応に及ぼす影響

深谷 真央 (東京大学) 日本列島におけるサクラマス種群の地理的遺伝構造

河野 啓太 (東京農工大学) マダニの宿主選択は動物の匂いで駆動される？：宿主臭気への選好性と寄生状況の解析

太田 千晴 (東京大学) 植物—微生物相互作用による土壌菌叢の形成機構

三岡 夏美 (東京農業大学) 小型鯨類の3タイプのヒレの流体力学機能の比較

野尻 康太 (東京大学) 四肢骨形態から探る齧歯類の環境適応：滑空性種を中心とした比較

Cathlyn SUIZO (東京都立大学) Understanding the Influence of Urban Green Spaces as a Mitigating Infrastructure against Flooding in Selected Suburban Cities in Tokyo, Japan

高階 眞丈 (横浜国立大学) 山形県月山ブナ林における冰雪藻類群集の空間変異

本田 真奈 (玉川大学) 釧路川源流域における倒流木の機能と生物多様性

天野 翔次郎 (東京大学) 海草藻場における環境要因に対する海洋保護区の保全効果の検証

【ポスター発表演題】

- 西川 愛美 (東邦大学) ツリガネニンジン分布拡大に伴う分化過程の解明
島村 皓志郎 (東京大学) タンキリマメの種子散布者の調査と擬態種子仮説の検証
添田 透真 (東京大学) イチョウの種子散布生態：イチョウの種子はなぜ臭いの
か？
田中 靖奈 (東京大学) 非繁殖期におけるウミネコの休息場所の特定
松本 咲月 (東京大学) 小笠原諸島固有種ウチダシクロキにおける形態および生
殖機能の雌雄分化の検証
古田土 康成 (茨城大学) *Hestina* 属近縁種間の飛翔高度によるニッチ分化
深谷 公紀 (千葉大学) エノコログサ属3種の種構成と土地利用の関係
武田 悠莉子 (東邦大学) 花蜜酵母の種組成に及ぼす要因の評価
阿部 智己 (信州大学) 人工巣穴・巣箱で見る外来シマリスの在来哺乳類および
鳥類への影響
黒羽 秀磨 (千葉大学) 太陽光発電施設内の排水設計と雑草管理が植物の多様性
に与える影響

【招待講演者】

- 福岡 拓也 (東京大学) ウミガメ類の採餌生態研究と環境学的研究への展開

(2) 2025年4月～2026年3月までの地区会活動リスト

- 1) 公開シンポジウムを2件開催した。詳細は、本号2ページから6ページまでの記事を参照してください。
- 2) 地区委員会・地区総会：2026年3月3日(火) オンライン (Zoom) にて実施した。総会では、2026年事業計画、予算案を審議し、承認された。
- 3) 新たに *Ecological Research* 誌に投稿・受理された関東地区会委員の論文のオープンアクセス費用の一部補助事業を開始し、1件の補助を行った。
- 4) 第46回関東地区生態学関係修士論文発表会：2026年2月15日(日) 対面開催にて実施した。詳細は上記(1)の通り。

2025年度会計報告

2025年度決算 (自2025年1月1日 至2025年12月31日)

種別	項目	計	備考
収入	地区会費	¥0	
	地区還元金	¥465,267	
	利子収入	¥10	
	その他	¥0	
	前年度繰越金	¥3,393,535	
	計	¥3,858,812	
支出	会議費	¥0	
	役員旅費	¥0	年1度の役員会(オンライン)
	事務費		
	通信費	¥0	
	消耗品費	¥0	
	雑費	¥0	
	金融機関手数料	¥495	
	小計	¥495	
	地区大会・シンポジウム等		
	会場費	¥78,600	
	人件費	¥0	
	講師謝金	¥0	
	講師旅費	¥83,540	
	印刷費	¥0	
	発送費	¥0	
	修士論文発表会	¥76,261	¥23,749(利息¥10含む)返金済み
	その他	¥10,000	イラスト代
	小計	¥248,401	
	会誌発行	¥0	PDF自作/web掲載
	その他	¥180,000	ERのOA補助1件
	(単年度計)	¥428,896	
	2026年度に繰越	¥3,429,916	
	計	¥3,858,812	

日本生態学会関東地区会報 第74号

発行日 2026年3月7日

発行者 〒274-8510 千葉県船橋市三山 2-2-1

東邦大学

理学部 内

日本生態学会関東地区会事務局